

特集「音声ドキュメント処理」の編集にあたって

中川 聖一^{1,a)}

この数年間の音声認識技術の一般社会への応用は著しく、音声による Web 検索、音声翻訳サービス、テレビ放送の字幕化等、音声認識技術が身近なものになってきた。20 年ばかり前までは、音声認識技術を一般に普及させるのにはどうしたらよいか、が研究者・技術者の間で一大関心事であったことを思えば、隔世の感がある。これには、音声認識技術の進歩が貢献していることはいうまでもないが、企業側の努力も見逃すわけにはいかない。研究で培われた技術を商用化するには、さらにワンステップの工夫が必要であるからである。技術レベルと社会の要求・受け入れ体勢がマッチしたときに、市場は大きく広がる。音声認識技術は、まさにこのような時代に突入したといつてよい。

最近、一般の人が「音声認識」という言葉を、日常会話で自然と使うようになってきている。どんな商品・技術もそうであるが、コマーシャルの影響は多大である。

このような世界の状況から、音声言語処理の研究は、ほぼ完成したかのように思えるが、けっしてそうではない。ユーザの一番の要望は、さらなる音声認識率の向上・頑健性の向上である。また、応用面として、膨大な音声データ（ビッグデータ）の利活用も課題である。

情報処理学会の音声言語情報処理研究会では、平成 18 年度に「音声ドキュメント処理ワーキンググループ」を立ち上げ、平成 23 年度まで活動し、この間、音声検索タスクの設定や音声ドキュメントの収録・公開を行ってきた。また、同時に、豊橋技術科学大学主催・情報処理学会音声言語情報処理研究会共催で、毎年「音声ドキュメント処理ワークショップ」を開催してきた。

このように、音声認識技術の進歩と音声ドキュメント量の増大ともなっており、音声ドキュメント処理の研究がさかんになっており、我が国の研究の現状をまとめるのは意義があり、今後のこの分野の発展に寄与すると考え、前回（2009 年 2 月号）に引き続き、特集号を企画した。特集号の対象分野は、講演・講義・会議・放送・対話・翻訳などの音声ドキュメント・音声コーパスに関する『データベース・分析、音声認識・理解、音響モデル・言語モデル、ドキュメント検索、ターム検索、要約、質問応答・音声対話、

メタデータ化・コンテンツ化、大規模音声データベースの処理・応用・利用システム、音声ドキュメント処理関連技術』として、学会のホームページ、音声言語情報処理研究会の会場、音声メーリングリストなどで募集した。

本特集号には 21 件（前回は 29 件）の投稿があり、そのうち採録数は 11 件（うち、英語論文が 3 件。前回の採録数は 13 件）となった。ワーキンググループの活動が主に音声ドキュメントの検索に重点を置いていたためか、11 件の採録数のうち検索関連が 5 件であった。なお、不採録論文の中には、優れた着想や有益な技術開発の論文もあったが、論文としての完成度が低く、短期間で修正できないとみなされ残念ながら不採録になったものも多い。論文の査読には、主に下記編集委員と音声言語情報処理研究会の研究運営委員に依頼した。関係各位のご協力に深謝いたします。

本特集号が、音声言語情報処理のさらなる発展に寄与できれば幸いである。

「音声ドキュメント処理」特集号編集委員会

- 編集長
中川聖一（豊橋技科大）
- 幹事
秋葉友良（豊橋技科大）、駒谷和範（名古屋大）
- 編集委員
相川清明（東京工科大）、伊藤慶明（岩手県立大）、岩野公司（東京都大）、伊藤彰則（東北大）、河原達也（京都大）、笹嶋宗彦（大阪大）、南條浩輝（龍谷大）、西崎博光（山梨大）、胡新輝（NICT/ATR）、松井知子（統計数理研究所）、三木清一（日本電気）、山下洋一（立命館大）

¹ 豊橋技術科学大学
Toyohashi University of Technology, Toyohashi, Aichi 441-8580, Japan

a) nakagawa@cs.tut.ac.jp